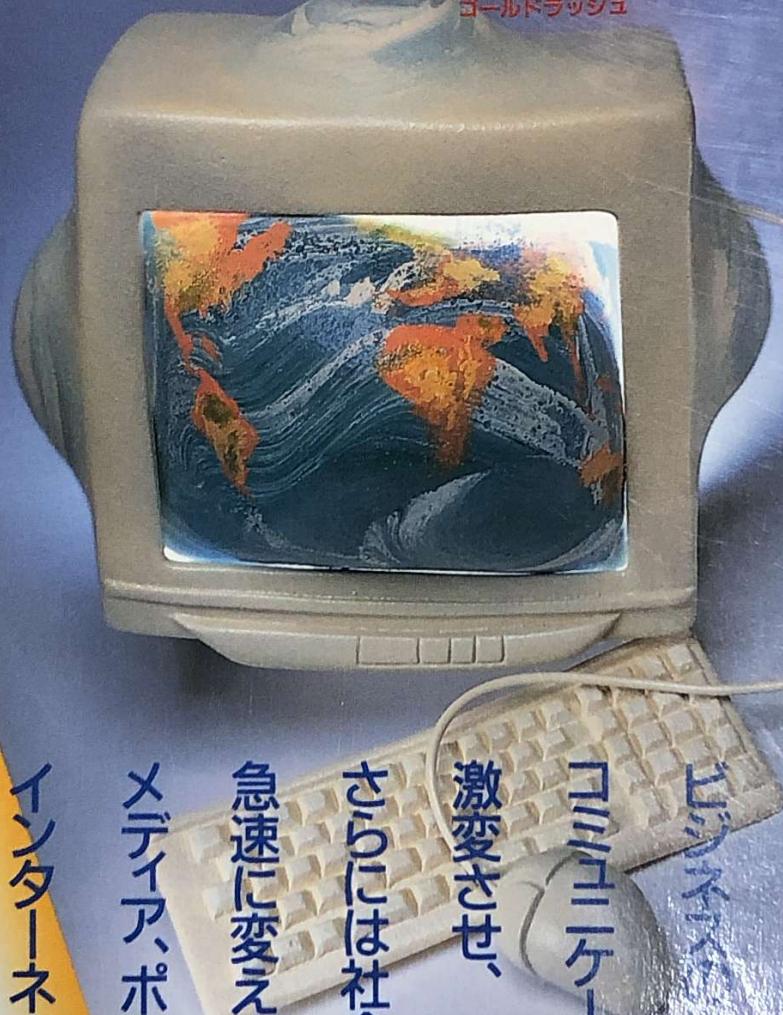


インターネットのネット 激震

いまそこにある「革命」の正体!

ゴールドラッシュ



「一つのテクノロジーが

世界中を席捲していく。

それは

ビジュアル

「マーケーションを

激変させ、

さりには社会全体を

急速に変えようとしている。

メディア、ポルノ、セキュリティ……

インターネットをめぐる

現場からの

緊急レポート!

ネットワーク犯罪は防げるか

森健

(フリーライター)

日本ももはやハッカーたちに狙われている。ハッカーたちのネットワーク侵入をどう防ぐのか。

「朝五時でした。自宅からちょっと見てみようと思って接続してみたんです。ところが、どうやってもつながらない。しかも、画面には普段と違った見たこともない反応がでる。これはおかしいと思つて、翌朝八時半、事務所に来たシステムオペレーターに様子を見てくれと電話した。そうしたら、データがどつさりなくなっていたんですね」

非営利パソコン通信の草分け、ニューコアラの事務局長、尾野徹氏は被害にあつた状況を力なく語つた。

今年四月十二日、四時五十四分、ニューコアラは何者かによつて侵入され、約一千人に及ぶデータフ

イルを破壊された。稼働する九台のサーバーのうち、パソコン通信用を除く、インターネット用の四台のサーバー、バイト数にして、数ギガがやられたのだ。約二千人の会員のIDやパスワード、百五十人分のホームページなどがきれいに消去されていたのである。

「十一年間やつてきたけれど、こんな悪質な事件は初めてです。そもそもうちの団体はアメリカの国防総省などと違つて、とくに秘密のデータなどがあるわけではない。日本で初めての大掛かりなクラック(破壊)事件だつた。そして、もはや日本も世界のコンピュータ犯罪のなかの大きな標的となつていることをあらためて意識づける事件となつた。

九一年、湾岸戦争の際イスラエルに住む十八歳の少年が米国防総省のコンピュータから機密情報を取り出していたというケース。九年、ロシアのハッカーが米シティバンク銀行のシステムに侵入し、一〇〇〇万ドルを盗んだというケース。

そして、九五年二月、軍や企業への不敵な侵入行為を繰り返したり、大量のクレジットカード番号

尾野事務局長はそう呟くと、復旧作業を続けた。

被害の規模と事件の公開の早さという点において、ニューコアラの事件は、インターネットによる日本で初めての大掛かりなクラック(破壊)事件だつた。そして、も

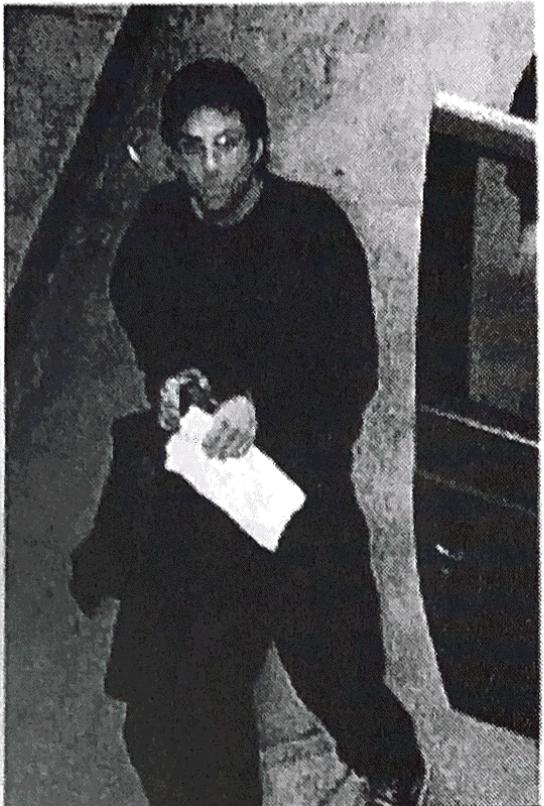
侵入しては、データを盗んだり、書き換えたり、破壊したりする一流のテクニックをもつ。正体不明の侵入者は、海外ではすでに何年も前から危険な存在として認識され、そのハッキングはしばしば紙面を騒がせてきた。

ハッカーの暗躍

ハッカー。言わざと知れた、通信ネットワークを利用したアウトローのコンピュータ・マニアのことである。コンピュータに不正に

Kevin Mitnick

An excerpt from *Takedown*.



Who is Kevin Mitnick? The picture that emerged after his arrest in Raleigh, N.C. last February was of a 31-year old computer programmer, who had been given a number of chances to get his life together but each time was seduced back to the dark side of the computer world. Kevin David Mitnick reached adolescence in suburban Los Angeles in the late 1970s, the same time the personal computer industry was exploding beyond its hobbyist roots. His parents were divorced, and in a lower-middle-class environment that lacked adventure and in which he was largely a loner and an underachiever, he was seduced by the power he could gain over the telephone network. The underground culture of phone phreaks had already flourished for more than a decade, but it was now in the middle of a transition from the analog to the digital

ケビン・ミトニック(<http://WWW.takedown.com>)

を盗んだりしていたという大物ハッカー、アメリカのケビン・ミト尼克がサンディエゴ・スーパーコンピュータセンターに務めるハッカー対策専門家の下村努によつて逮捕されるという事件も記憶に新しいところだ。

実際、米カーネギーメロン大学の調べによると、八九年に百三十二件だったハッキング事件は、九四年には二千三百四十一件と大幅に増加している。これはパソコンユーザーとネットワーク、両方の増加と結びついていると考えても不思議はない。

これまで日本のネットワーク環境は大きな被害に遭わずにこられた。それは、「単にコンピュータ環境が日本語版だったことが大きな理由」と指摘するのは、東京のネットワークコンピュータ技術会社「ネットワンズシステムズ」に務める、白橋明弘氏である。

日本も含め、世界中のネットワーク環境でもつとも多く使われ、またハッカーに狙われてきたのが、サン・マイクロシステムズ社のサンOSと呼ばれる Unix OS のなかでもアマチ

ところが、日本では英語環境ではなく、日本語版を利用してきた。そのためにハッカーも手をこまねいてきたと言える。だが、裏を返せば、セキュリティ対策が立ち遅れていたのも事実で、そのためには日本のネットワークは無防備状態と揶揄されたこともある。

ニューコアラの場合、このセキュリティ対策の甘さをつかれた事件だったが、日本もすでに国際的に暗躍するハッカーたちのターゲットに入っていると言える。白橋氏にその点を訊ねると――。

「ここまで根こそぎ持つていかれることは、今まで日本ではなかつた。その点驚いてます。詳しいことは、これから調査することになります。やがて、侵入されたことをすぐ公開したことは、評価に値します。やはり、信用情報と絡むから、なかなか公開されることはなかつたからです。」

犯人像としては、ハード上に残ったデータの改ざん内容から、外国人、そして単独でのハッキングと思われます。かつ、どちらかといふとハッカーのなかでもアマチ

ユア的な愉快犯でしょう。という
のは、もしその道のプロハッカー
だったら、自分が侵入できたサー
バーは貴重な侵入経路になるから
すぐに破壊することはせず、のち
に悪用するまでとつておくわけで
す。でも、今回のニューコアラの
場合は、侵入していきなり破壊
している。おそらく存在の誇示の
ような意味合いだつたんでしょう」
これまでのハッカー像というと、
概して侵入行為自体に喜びを見い
だす愉快犯が多かった。過去には、
自らの存在を誇示し、稼働中のシ
スオペとチャットで会話をしたと
いう、ある意味で微笑ましいエピ
ソードをもつハッカーさえいる。

犯罪としての ハッキング

「ネットワーク・モニタリング・
アタック」という事件。
白橋氏もそのとき緊張感を味わ
つたひとりである。

「CERTからの勧告によると、
ある組織的なハッカーたちがいっ
せいに世界中のサイトに侵入し、
パスワードやアカウント・ナンバ
ー、ルーターなど、ネットワーク

テムを構築しているケースが増え
てきた。そうしたいわゆるイント
ラネットというものに対して、カ
ネで雇われてハッキングするとい
う動きが見えてきた。実はこれが
今いちばん大きな問題なんです」
実際アメリカでは、ある建設会
社が入札に際し、インターネット
経由でライバル会社の情報をハッ
キングし、一〇〇万ドル単位の競
争入札でわずか九〇〇ドルの差で
入札に成功、あとになつてハッキ
ングが判明したという産業スペイ
ングの事件も起こっている。

また、世界規模でいつせいにハ
ッカーが攻め込むという組織的な
犯行さえすでに起こっている。

一九四四年二月現在のところ、イン
ターネット最大の危機と呼ばれた

「ハッキング」事件。
ところが、この数年で目立つて
きているのは、明らかに犯罪目的
で機密データを狙うという犯罪組
織の存在なのである。もちろん狙
いは、国家そして大企業である。

白橋氏は言う。

「いまやネットワーク社会となっ
て、企業もインターネットでシス
トムを構築しているケースが増え
てきた。そうしたいわゆるイント
ラネットというものに対して、カ
ネで雇われてハッキングするとい
う動きが見えてきた。実はこれが
今いちばん大きな問題なんです」
実際アメリカでは、ある建設会
社が入札に際し、インターネット
経由でライバル会社の情報をハッ
キングし、一〇〇万ドル単位の競
争入札でわずか九〇〇ドルの差で
入札に成功、あとになつてハッキ
ングが判明したという産業スペイ
ングの事件も起こっている。

CERTの活動

CERTの活動は主に、ハッカ
ーの被害に遭つた団体から連絡が
あつたら、すぐに駆け付けて、手
口を分析し、あらたにセキュリテ
ィシステムを構築する活動と、も
う一つは、その被害と対処の方法
を広く一般に公開するという活動
に分かれている。同様の組織は、

白橋氏は、二年ほど前よりこの

CERTの日本版の設立を働きか
けてきた研究グループのひとりで
ある。今回のニューコアラの事件
もすでにコアラ事務局から報告を
受けており、「ネットワーク・モニ
タリング」の際も侵入防止に当た
っていた。だが、正式な機関とし

じることになったんです」

CERTとは、八八年にアメリ
カ・カーネギーメロン大学に設け
られた非営利のコンピュータ緊急
対策チームである。

このときは、CERTのメリ
ンゲ・リストの勧告により被害を
最小限にとどめることができた。
CERTとは、大型に分割したデータ(データ)をモニターしていく、つまり監視する可能性があると言つてきた
わけです。正直言つてこのときは、
非常に緊張しました。幸い日本では、
は、東工大や中部大などいくつか
の被害だけですみました。けれど、
日本版CERTの重要性をより感
じることになったんです」

だが、そんな過酷な状況にもか
かわらず、CERTでは、不偏不
党、厳正中立という理念は厳然と
守り通されている。たとえ調査に
のりだしてもCERTからは絶対
に連邦警察などには通報しない、
あるいは新しいシステムを提供す
るにしてもデータの元になつた被
害の身元は明らかにしない、とい
う立場をとっている。

白橋氏は、二年ほど前よりこの
CERTの日本版の設立を働きか
けてきた研究グループのひとりで
ある。今回のニューコアラの事件
もすでにコアラ事務局から報告を
受けており、「ネットワーク・モニ
タリング」の際も侵入防止に当た
っていた。だが、正式な機関とし

つた。

しかし、もはやハッカーも目の前に現われるにいたって、日本版CERTの設立が具体化したのである。

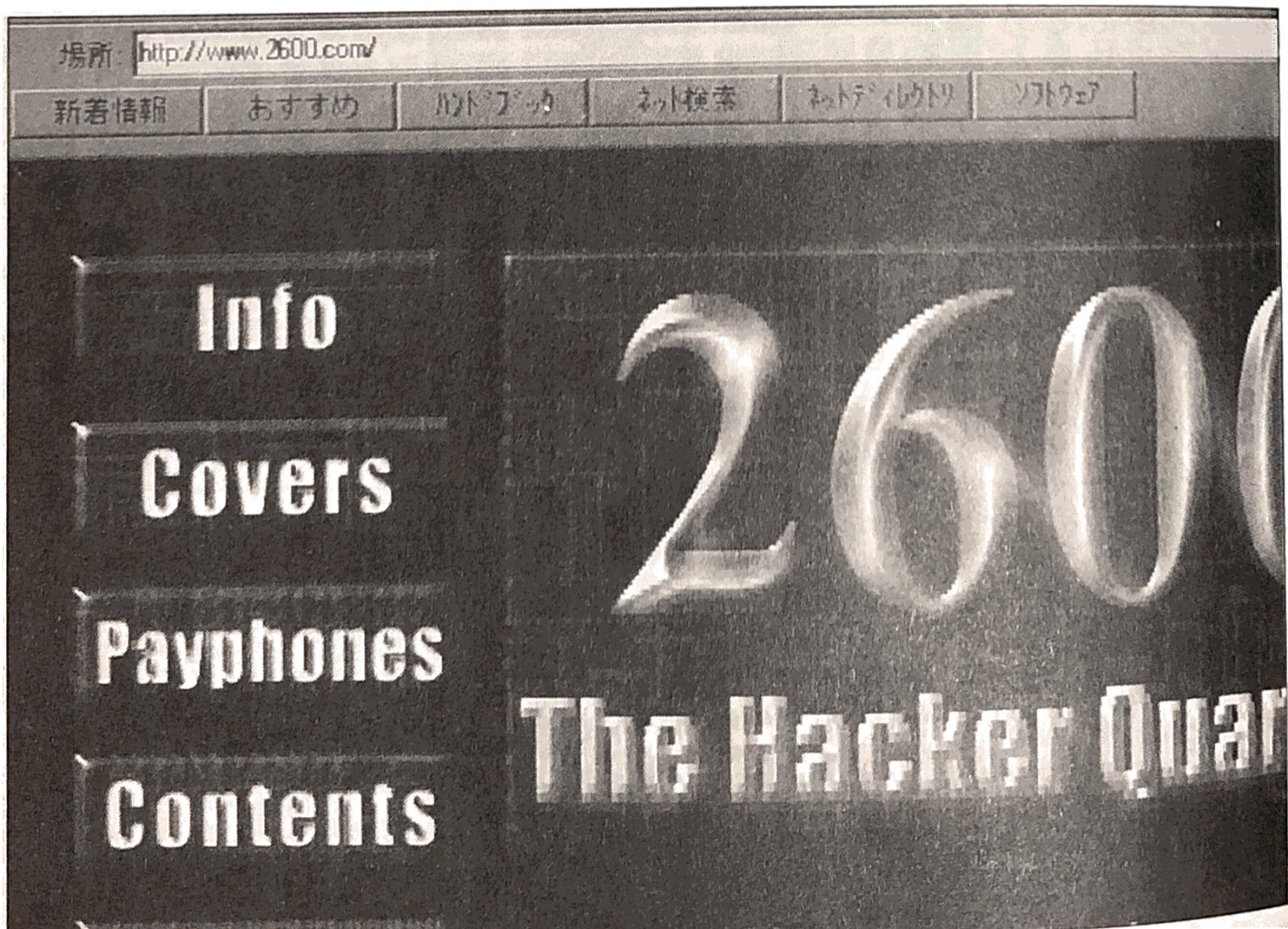
CERTの中立性が、日本版CERTの設立が遅れた理由だと指摘する声もある。白橋氏と行動を共にする、奈良先端科学技術大学院大学の山口英助教授はこう言う。「この中立性をなんとか保ちたいために、発足が遅れてしまつたんです。国に任せてしまふと、どこかで管理される怖れもあるし、営利目的ではメドがたたない。かといつて学術の人間が片手間にできる活動ではない。けれど、だんだんネットワークの国際犯罪も増えており、かなり危機的状況は迫りつつある。だから、とりあえず発進することにしたんです。組織の性格としては、警察ではなく、あくまで消防署で、救助と防災が中心。出資段階では通産省に公的資金として負担してもらうけれど、将来的には、産学官の協同組織にし、サービスなどの整備を含め二～三年で独立採算をとれる形態に

する予定です」

だが、根本的な疑問として、日本版CERTを設立したところで、その被害を訴える団体があるかどうかという問題もあるという。と

いうのは、日本の場合、もしハッカーに侵入されてもそのセキュリティの甘さと不名誉を衝かれるのが嫌で、その報告をしないのではなかいかというのだ。実際、これまでハッカーに侵入されたことがあっても、それを公表していない日本企業が多い、と白橋氏も言う。だが、CERTという団体の性質上、もし報告されなければ、何も活動できないということになる。要は、一つの被害を調べたら同じ手口がほかに拡がらないようにアナウンスするというのがCERTの役目だからだ。これも国民性の違いかもしれないと白橋氏は頭を悩ませる。

「確かに侵入されること自体は不名誉なことかもしれない。でも、アメリカでは被害は全体に公開することで評価される。それは一つの不利益はのちに全員の利益につながるからです。でも、そういう



ハッカー雑誌「2600」のホームページ(<http://www.2600.com>)

た考えが日本で通用するかどうか。
疑問です」

セキュリティ神話の盲点

現在、もつとも一般的なセキュリティソフトとしては「ファイア・ウォール（防火壁）」と呼ばれるものがある。これは、サーバーの端末の入り口で、入ってくるものがアカウント・ナンバーをもつ

てあるかをその場でチェックし、もつてない場合はその場で入ってくるものを阻止するというものだ。I-I-Jなどでは、端末自体にあらかじめこうしたセキュリティソ

フトを組み込んでいるというが、（まだプロバイダー）とくにインターネットネットチームを当て込んで、昨年来雨後のタケノコのようにできた二次プロバイダーのなかには、そうした対策を講じていないところが多い。白橋氏は警告する。

「まずすべてのプロバイダーは、危機管理意識と、それに伴う技術を身につけてはいけないでしょう。現状では、両方ともレベルがあまりに低く、いつニューコア

ラの二の舞を踏むともかぎらない。

とはいって、どんなに完璧に近い防

御ソフトを作つても、ハッカーは必ず侵入する可能性はある。完全なソフトというものは存在しないからです。それは、外出する際に家のドアに鍵をかけなければ泥棒に入られるのと同じことで、絶えずコンピュータに最新の鍵をつければ、一応は大丈夫なはずなのがアカウント・ナンバーをもつていても、ネットワーク上にいるかをその場でチェックし、もつてない場合はその場で入つてくるものを阻止するというものです。

逆に言えば、ネットワーク上にあるコンピュータに鍵をかけておくのは当然のことであり、セキュリティをかけないのは自殺行為というわけだ。

今WWWを見回せば、単なるデータの保護ばかりでなく、さまざま

な新しいシステムも導入されつつある。そのなかには電子マネーというシステムもあれば、急速に浸透しつつあるWWW上のクレジットカードでの決済などもある。こういった新システムは、一方では歓迎されているが、一方ではその危険性を訴える声もある。つまり、暗号化しないでクレジットのアカウントナンバーを送ると、盗

聴され悪用されるのではないかと

いう怖れである。だが、白橋氏はそれもまた誇張された考え方だと言ふ。

「たとえば、ファックスによる通信販売では見知らぬところに自分のクレジット番号を送ることがあります。ネットワーク上も危険率はこれと同じことなんです。というのも、クレジットにはあらかじめそういう不正使用に備えた保険機能というものがあるし、またクレジット企業側でもそういうった危険率を見越して使用料金を設けています。だからむしろ問題は、そういった社会的慣習がネットワーク上ではまだ確立されていないということなんです。要は既存の仕組みを拡張すればいいんですね」

こうして聞いてみると、ハッカーの侵入は、あまり脅威に考えすぎることもないよう気にもなる。だが、安心できるわけではない。ある面ではまだまだハッカーにとつて日本はやりやすい事情があるのだ。それは法制度からの面である。日本はやりやすい事情があるのだ。

もし日本のコンピュータに侵入しても、さほどお咎めがないとなれば、日本のサイバースペースはハッカーにとつては天国とも言える環境なのだ。

現状では、幸か不幸かまだ日本にはハッカーとなりうる技術をもつた悪人がいないのが救い、と白橋氏は言う。だが、日本版CERTも未完成な今、国際的組織で踏み込まれたら、ひとたまりもないのも確かである。果たして日本版CERTが環境整備をするのが先か、ハッカーが踏み込むのが先か、どちらの側とこちら側での攻防はこれから本格的に幕を開くところだ。

盗罪という括りしかない。つまり相手のコンピュータの使用時間を盗んだというような罪状になるわけだ。さらに日本の法制度上、ハッキングを立証するのが難しい。

ほんどのハッカーの場合、証拠を残さないという事情もあるうえ、日本の法廷では電気系の記憶媒体、それはカセットテープでさえ証拠物件として認めにくい傾向があるからだ。

もし日本のコンピュータに侵入しても、さほどお咎めがないとなれば、日本のサイバースペースはハッカーにとつては天国とも言える環境なのだ。

現状では、幸か不幸かまだ日本にはハッカーとなりうる技術をもつた悪人がいないのが救い、と白橋氏は言う。だが、日本版CERTも未完成な今、国際的組織で踏み込まれたら、ひとたまりもないのも確かである。果たして日本版CERTが環境整備をするのが先か、ハッカーが踏み込むのが先か、どちらの側とこちら側での攻防はこれから本格的に幕を開くところだ。

筆者紹介

●西田通 にしがき・とおる

'48年東京都生まれ。東京大学工学部計数工学科卒。日立製作所主任研究員、明治大学教授を経て、現在、東京大学社会科学院教授。著書に、『マルチメディアア』(岩波新書)、『聖なるヴァーチャル・リアリティ』(岩波21世紀問題群ブルックス)など。

●増田剛 ますだ・たけき

'58年山口県生まれ。桃山学院大学社会学部卒業。出版社勤務を経てフリーに。著書に、『知的時間活用術』(日本経済新聞社)、『知的メモ術入門』(かんき出版)など。

●森健 もり・けん
'68年神奈川県生まれ。早稲田大学法学部卒業。フリーライター。

●浅野智明 あさの・ともあき

'68年埼玉県生まれ。早稲田大学政経学部卒。出版社勤務を経て現在フリー。

●安田里央 やすだ・りお

エロ系の雑誌を中心で活躍するフリーライター。

●長尾剛 ながお・たけし

'62年東京都生まれ。東洋大学卒。在学中よりフリーのライターとして活躍。著書に『漱石ゴシップ』(ネスコ)、『漱石学入門』(オマ書房)など。

●永江朗 ながえ・あきら

'58年北海道生まれ。法政大学卒。「レジ

エンド」編集部を経て、フリーに。著書に『菊池君の本屋』(アルメディア)など。

●倉増裕 くらます・ひろし

'48年大阪府生まれ。北海道大学教育学部卒。大阪に在住し、コンピュータ関連分野を中心に精力的な取材を続ける。

●日高敏 ひだか・さとし

'45年東京都生まれ。著書に『西澤潤一独創の系譜』(ダイヤモンド社)、共訳書に『世界地下鉄物語』(晶文社)。

●淵沢進 ふちざわ・すすむ

'56年岩手県生まれ。科学、テクノロジーの分野で精力的に執筆活動を行なう。共著に『日本の頭脳100人—先端科学技術をリードする研究者たち』(三田出

版会)。

●下関マグロ しものせき・まぐろ

なんでも体験しよういうウラものライタ。守備範囲はセックスタから政治経済まで。ミニコミ誌「わにわに新聞」主催。

●脇英世 わき・ひでよ

'47年東京都生まれ。早稲田大学理工学部卒。現在、東京電気大学教授。著書に、『ビル・ゲイツの野望』(講談社)、『Windows入門』(岩波新書)。

●丹波清隆 にわ・きよたか

'52年神奈川県生まれ。東京外国语大学大院修了。フリーライター。

別冊宝島二六二号 【インター・ネットの激震】 一九九六年六月十六日発行

編集長——井上学 編集——梨本敬法・降旗正子・近藤隆史・和田優子(太字は本号担当者)

編集局長——石井慎二

発行人——蓮見清一

発行所——株式会社宝島社○〒1-102 東京都千代田区麹町5-5-5 電話〈営業部〉03-3234-4621 〈編集部〉03-3234-3692

郵便番号=001-70-11-1708229
株式会社宝島社